



世界最高峰エベレストの頂上に立つ尾崎 隆さん

5月12日、世界最高峰エベレスト(中国名チョモランマ=8,848m)で、登山中に高山病で亡くなられた亀山市出身の尾崎隆さん。

尾崎さんは、1980(昭和55)年のエベレスト北壁からの世界初登頂をはじめ、世界の8千m峰14座のうち7座の登頂に成功。世界的な登山家として知られた尾崎さんの生い立ちや功績をご紹介します。

▲山との出会い

尾崎隆さんは、1952(昭和27)年、3人兄弟の次男として、亀山市本町四丁目で生まれました。

小学生のころ、蝶の採集が好きな兄と一緒に、近所の野原や鈴鹿の山々へ頻繁に出掛けていた尾崎少年。自然や山にあこがれる気持ちが次第に芽生えていきます。

そんなころ、亀山市の北西に位置する野登山(851m)への登山を試みるも、ことのほか苦しかったようです。中学生になると体力もアップし、山登りの回数も増え、蝶の採集から山登りの方に情熱が傾いていきました。



▲登山家の道へ

高校は、四日市中央工業高校に進学し、山岳部に入部。次のフィールドは御在所岳(1,209m)になりました。

授業で見た山岳映画で、美しいアルプスの風景をバックに、登山家が目もくらむような高さの岩壁をよじ登っていくシーンに、心を奪われ感動。自分の求めているものに会え、いつかあのアルプスの山々に登る日が来るかもしれないと思うと胸がうちふるえたそうです。

それからというもの、登山の本を読みあさり、石水溪の鬼ガ牙などで岩登りの練習を積み重ね、世界で一流の登山家を目指し、突っ走っていきます。

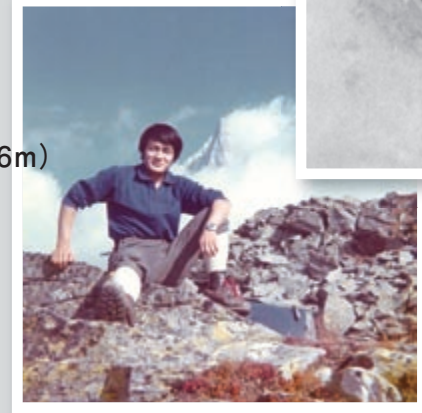
高校を卒業後、会社に就職してからは、休みは全て御在所岳の岩場に通り、トレーニングに励み、冬のヨーロッパ・アルプスへの登山を目標に日々努力の毎日を送りました。

1972(昭和47)年、19歳の夏、高校時代に見た映画の舞台であったドリユ・ボナッティ稜やグランドジョラス(4,208m)など、ヨーロッパ・アルプスの登頂に成功し、着実に登山家としてのキャリアを重ねていきます。



尾崎隆さん 主な登頂歴

- 1972(昭和47)年 グランドジョラス北壁(4,208m)
- 1977(昭和52)年 ブロードピーク(8,047m)
- 1979(昭和54)年 マッキンリー南壁(6,194m)
- 1980(昭和55)年 エベレスト(8,848m)
- 1981(昭和56)年 マナスル主峰(8,156m)
- 1983(昭和58)年 ローツェ(8,516m)
- 1983(昭和58)年 エベレスト(8,848m)
- 1984(昭和59)年 カンチェンジュンガ主峰(8,586m)
- 1985(昭和60)年 アイランドピーク(6,189m)
- 1986(昭和61)年 シシャ・パンマ(8,013m)
- 1996(平成8)年 カカボラジ(5,881m)
- 2001(平成13)年 マカルー(8,463m)
- 2010(平成22)年 キリマンジャロ(5,149m)



▲2年間のブランク

そんな順風満帆の尾崎さんに、突然、死の恐怖が襲います。

自身が尊敬する著名な登山家の死をきっかけに、「自分の命は一体何なのか」「なぜそんな危険をおかしてまで登らねばならないのか」と自問自答を繰り返しました。

結局、死の恐怖に耐えられなくなり、それまで情熱の全てを傾けていた登山を止めてしまいます。

後に「まだ冬のアルプスの過酷さに耐えられるほど、精神的に成長していなかった」と自身で振り返っています。

▲ヒマラヤの山々に挑む

がむしゃらに登った日々から一転、同世代の人たちと同じような生活に、徐々に物足りなくなった尾崎さん。

愛知学院大学山岳部OBの方に勧められて、1974(昭和49)年10月に、「第2次RCC(ロック・クライミング・クラブ)中部支部」に加入。再び、登山家の道を進み始めます。登山をする者にとって世界の屋根といわれるヒマラヤの山々を新たな目標に定め、再出発することとなりました。

2年間のブランクを取り戻し、未知なる高い山に挑むため、石水溪の鬼ガ牙や御在所岳を少しでも早く登るスピードトレーニングを日夜繰り返しました。

厳しいトレーニングの末、1977(昭和52)年、24歳で、8千m峰では自身では初めてとなるブロードピークに登頂。

さらに、1980(昭和55)年には、エベレスト北壁からの未踏ルートから世界初の登頂。1981(昭和56)年

に、酸素補給機を一切持たずにマナスルの無酸素登頂に成功。数々の8千mを超える山々を制覇していきました。



▲生還することが大切

登山を続けていく中で「登山は、登頂することよりも生還することが大切」を信条にしていた尾崎さん。そのことに関して、弟の修さんは「兄の好きな鈴鹿の山々を、自分が高校生のとき兄と一緒にトレーニングして、いつも見ていたのは、登山に行ったときに必ず帰ってくるためのトレーニング。山登りよりきついトレーニングをして、必ずここに帰ってくるんだと、兄の背中を追っかけて走りながら感じ取っていました」と話されました。



尾崎さんの思い出を語る弟の修さん